

ローマ15章14-33節 「パウロの福音の働き」

1A 福音を伝えることに対して 14-21

1B 異邦人への務め 14-16

2B 語られていない所への宣教 17-21

2A 計画を立てることにおいて 22-29

1B ローマへ行く希望 22-24

2B エルサレムの兄弟への醸金 25-29

3A 祈りに対して 30-33

本文

ローマ人への手紙 15 章を開いてください、私たちは後半部分 14 節から見ていきたいと思いません。パウロは、ほとんど全て、自分が知っている神の福音について彼らに言い述べる事ができたのですが、最後に、自分自身の福音宣教の働き、務めについて、その個人的なことを書いていきます。手紙の初めのところにも書いていたのですが、再びその話題に戻ります。パウロの福音宣教に対する姿勢を読みながら、どのようにして福音が広がっていくのか、またその姿勢から私たちも宣教への思いが与えられるように祈りつつ、読んでいってみましょう。

1A 福音を伝えることに対して 14-21

1B 異邦人への務め 14-16

14 私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。

これは、前回の学びの最後の部分、「13 どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」という言葉の続きです。聖霊の力によって、望みにあふれさせてくださいますように、と祈っています。その前には、信仰の強い人とそうでない弱い人がいて、いたわり合うことによって思いが一つになり、声を一つにして神をほめたたえることができるように、と祈っていました。ローマにいる信者には、いろいろな課題が当然ながらありましたが、けれども、パウロは彼らがキリスト者として成長し、成熟へ向かっていることを確信していたのです。

「善意にあふれ」る、とありますが、これは良い品性があるということです。13 節で聖霊の力によって望みがあふれるようにと祈っているように、ここでも同じように聖霊によって、善意があふれるようになると確信しているのです。御霊の実のことを考えてみましょう、「ガラテヤ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる

律法はありません。」そして、「すべての知恵に満たされ」とありますが、これは知識とも訳せる言葉です。ここには、イエス・キリストを知っているという知識、その関係そのものを指しています。それにあふれることができると確信しています。

そして、「互いに訓戒し合うことができる」と言っています。訓戒とは、正し、時にはしっかりと戒め、また励ましを与えることです。これが、いわゆるカウンセリングと言ったらよいでしょうか？ 私たちは、カウンセリングを専門的な分野にしてしまっている問題があります。しかし、本当に悩みが解決されるというのは、関係性から来ています。ここに、「互いに」という言葉がありますね。私たちキリスト者の間で、互いに行なうものなのです。これは何しも、聖書の言葉を引き合いに出して、何が間違っているのかを示すということではありません。時にそういうことがあるかもしれませんが、罪を犯してしまった時、失敗した時は、もう既に自分は罪を犯してしまったということを知っています。励まし、慰め、希望を与えることも必要でしょう。パウロは、コロサイにある教会に対しても同じ勧めをしています。「コロサイ 1:27-28 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」

15 ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらったためでした。

パウロは彼らがキリストにあって、これらのことができると確信しているけれども、それでも「かなり大胆に書いた」と言っています。大胆というのは、隠さないで、そのままはっきりと明らかにすることです。恐れることなく、自由に語るというのが、大胆の元々の意味です。それで、ローマにある教会について、彼らについて主にあって確信はあるけれども、それでも様々な課題について、切り込んで話していきました。そしてなぜ、大胆に書いたのかと言いますと、「あなたがたにもう一度思い起こしてもらったため」と言っています。思い起こすことは必要ですね、知っていることであっても思い起こす必要があります。ペテロも第二の手紙で、かなり大胆に書いているのですが、同じことを話していました。「2ペテロ 1:12 ですから、すでにこれらのことを知っており、現に持っている真理に堅く立っているあなたがたであるとはいえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです。」

16 それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。

16 節から、パウロがキリスト・イエスの仕え人になっていることの経緯を話しています。しかも、異邦人のための仕え人となっていることを話しています。彼にとっては、ローマ書において、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、信じるすべての人が救いを得る神の力である福音を宣べ伝えていました。ユダヤ人だけでなく、異邦人も同じ福音によって救われます。そして異邦人も、キリストにあってユダヤ人と同じように御国を受け継ぎます。異邦人とユダヤ人はキリストにあって一つ体とされています。この奥義を伝えることが、彼のとつての大きな使命でありました。それが、「異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人」という言葉に含まれています。そして、「神から恵みをいただいている」とあります。彼の原動力は、自分は神の怒りを受けるに当然の人間なのに、憐れみを受けているという確信があります。自分がキリスト者を迫害していた、ユダヤ教過激派、テロリストであることを認め、その元テロリストが福音を伝えているところに、神の恵みがあることを話しています。「1テモテ 1:13-16 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」

そして、パウロは次に自分が「祭司の務めを果たしてい」と言っています。これは比喩的に話しています。異邦人を云わば、神への供え物として、彼らを神の前に捧げたということを意味しています。すでにローマ 12 章 1 節でそのことを話していました。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

2B 語られていない所への宣教 17-21

17 それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。18 私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、19a また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。

ここで福音宣教において、パウロが自分を誇りにすることなく、主を誇りとしている姿を見ることができます。「私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです」と言っています。私たちが主にあって誇りを持つことができるのは、主の仕え人として、主の命じておられること、主の御心に従ったということについての満足感です。そしてパウロはここで、ユダヤ人にとっては魅力的ではなく、むしろ卑しめられるような働きであっても、パウロは主にあって誇りにしていたのです。

そして、「キリストが異邦人を従順にならせるため」と言っていますが、これは福音を信じる信仰における従順です。手紙の冒頭で言っていました。「1:5 このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」そして、キリストがそれを成し遂げられたこと以外は話さないと言っています。これ、大事ですね、私たちはしばしばキリストが行なわれたことなのに、そこに尾ひれを付けて、自分の功績も話してみたいと思ってしまいます。パウロは、キリストが成し遂げたことのみを話します。それが、「ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力」であります。パウロの宣教の働きの中に、これらのことが現れました。ことばと行ない、そしてしるしと不思議、そして十字架の言葉を語り、救われる人々が出て来る時に、御霊の力の現れがありました。これらは、パウロが行なっていることではなく、彼を通してキリストが行なわれていたことです。特に、徴と不思議は、使徒が使徒であることの印でありました。「2コリント 12:12 使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです。」

19b その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。

パウロは福音の働きを、エルサレムから始めました。けれども、主にはアンティオケから小アジア地方、そしてマケドニヤとアカヤ、すなわちギリシヤへと広がっていきました。そして、「イルリコ」はマケドニヤの北にある地域です。使徒の働きには、その記述はないのですが、マケドニヤの北の地域にまで宣べ伝えたということです。そして、ここで大事なのは、「くまなく」伝えたということです。そこにあるのは、イエス様が言われた「すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。(マルコ 16:15)」の意味が込められています。

20 このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。21 それは、こう書いてあるとおりです。「彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。」

パウロが召されていたのは、確かに使徒の働きでした。それは、「まだ福音が宣べ伝えられていないところで伝える」という働き、開拓者のような働き、宣教者としての働きです。そして、これが使徒的な働きと言えるでしょう。今日の教会で、「五役の回復」とか、「使徒職の回復」という言葉が使われますが、権威や力だけが強調される嫌いがあります。しかし、本来の使徒の働きは、まだ福音が伝えられていないところに伝えることです。多くの人々が、他の誰かの働きの上で働こうとします。それも貴重です、誰かが種を蒔き、他の誰かが水を注ぐことがあります。けれども、他の人が据えた土台の上で、働きをしようとする人たちがしばしばいます。コリントにおいては、パウロが建て上げたのに、その後でユダヤ主義者らがやって来て、パウロのことを引き落としながら、自分たちが新しいこと、正しいことを教えているのだとして彼らを自分たちのところに引き寄せようとして

した。しかし、まことの仕え人は、他人の土台の上に建て上げようとしません。

2A 計画を立てることにおいて 22-29

そしてパウロは、これからの宣教についての計画を語ります。その計画においても、宣教がどのような形で進んでいくのか、その優先順位がどうなるのかを知ることが出来ます。

1B ローマへ行く希望 22-24

22 そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、23 今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行くばあいは、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので、24 ..というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです。..

パウロは、手紙の冒頭においてもローマに行くのが妨げられていたことを書いていました。「ローマ 1:13 兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。」けれどもここ22節で、何が妨げになっていたかが明確になっています。「そういうわけで」ということです。20-21節で、今、私たちは、パウロが他の人が据えた土台では働かない、とありました。すなわち、新しい福音を語るどころが、彼の前に広がっていたということです。ローマに行こうと思ったら、他に次の宣べ伝える所へと導かれました。ローマはもちろん、既に他の人たちが土台を据えたところなので、そうではないところに導かれたので、それでローマに行こうと思っても、その機会が増えてなかなか行けない、ということです。このように、自分に与えられた使命がはっきりとしていて、ゆえに神のご計画に沿って自分が行くところが決まって来る、ということができているのはすばらしいですね。

そしてパウロは、「イスパニヤに行」こうとしています。スペインのことです。イスパニヤに行くのなら、陸路にしろ、海路にしろ、必ずローマを中継地としなければいけません。それで、ローマに立ち寄ろうとしています。そこで、彼が行ないたいのは、「しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいる」ということです。彼らに、自分に与えられた賜物を用いて、分かち合うこともするのですが、それ以上に、彼らから多くのものを得たいとも願っています。「1:11-12 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」

2B エルサレムの兄弟への醸金 25-29

それで、パウロはローマに行くのかというと、そうではありません。その他に、彼の福音宣教の働

きにとって大事なことがあったのです。

25 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。26 それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醸金することにしたからです。

パウロは、エルサレムに行きます。私たちは使徒の働きで、パウロがアカヤにいたところからマケドニアに戻り、それから船でエペソの近くをいき、そして地中海を渡り、カイザリヤに行きました。そしてエルサレムに行っています。そして、使徒 21 章を読みますと、パウロがエルサレムの聖徒たちに会っている様子を伺えます(17 節以降)。「聖徒たちに奉仕する」とは一体どういうことかと言いますと、ここにあるように「醸金する」ということです。

なぜ、彼らは貧しくなっているのでしょうか？その背景は何なのでしょう？一つに、エルサレムにいる兄弟たちに大飢饉が襲っていました。それで既に、アンテオケにいる兄弟たちが救援物資をユダヤの兄弟たちに送っています(使徒 11:29)。次に、彼らは迫害を受けていたので、経済的に逼迫していたことでしょう。そして、彼らの財産の運営に問題があったかもしれないです。彼らは財産を全て共有しました。そのような共産制には無理があったかもしれません。それで貧しくなりました。

27 彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。

貧しい人を助けるということは、旧約聖書の律法に強く書かれています。そして新約時代の教えにも受け継がれています。けれども、ユダヤ人信者にとって、それは当惑したことでしょう。異邦人で信者であるということが、まだ実感が湧きでなかったかもしれません。彼らは割礼を受けていないし、律法を守っていないのに・・・というような思いが、少なからずあったかもしれません。そして、ユダヤ教に貧しい人を施すという教えがあります。しかし今、自分たちが貧しく、異邦人から援助を受けることにためらいがあったかもしれません。

けれども、パウロには大きな目的がありました。このことによって、異邦人とユダヤ人に、確実な愛による一致の実を結ばせたかったのです。異邦人も、ユダヤ人の兄弟たちに醸金することによってその恵みにあずかってほしいと思っていました。彼の情熱は、ユダヤ人と異邦人が愛によって結ばれ、一つにされていることです。そしてパウロは言っています。「異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」ユダヤ人の信者たちによって、福音が広がり、彼らの働きによって異邦人が霊的に恩恵を受けました。霊的に

恩恵を受けたのだから、物質的に奉仕すべきということを話しています。これは、福音の働きをしている人にも同じ原則を、パウロは話しています。

28 それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニヤに行くことにします。29 あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています。

エルサレムに行ったパウロは、騒動が起こり、それでローマに捕えられてカイザリヤにいて、それから船でローマへと渡ったということを使徒の働きの中で見ます。それは、福音を同胞の民に語るということの他に、実を渡すことも目的にありました。それが確かにできたら、安心してローマに行くことが出来ます。そしてイスパニヤに行けます。ここで、「キリストの満ちあふれる祝福」というのは、「この結実に確認の印が押される」という意味合いがあります。異邦人の間に、確かにユダヤ人に奉仕するということに、彼らの中に実が結ばれていることが確認できるということです。

3A 祈りに対して 30-33

そして、このような、広範囲にわたる宣教計画の中で、パウロは祈りを要請します。

30 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。

宣教の働きのためには、パウロは臆することなく祈りを要請しました。なぜなら、祈りが必要だからです。私たちも、アメリカの教会でこの宣教の働きについて祈られています。「力を尽くして神に祈ってください」と言っています。力を尽くすということは、労苦することです。努力することです。執り成しの祈りには、このような労苦が伴います。チャック・スミスがこのようなことを言いました。「エペソ 6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」

そして、何のために祈っているのか、二つ挙げていますが、「主イエス・キリストによって」そして、「御霊の愛によって」であります。主のために祈り、また御霊の愛があるから祈ります。御霊から来る愛によって、パウロを愛し、パウロたちを愛しているなら、彼ら一行のために力を尽くして祈るはずで、三つの祈りの課題を挙げています。

31 私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。32 その結果として、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることができますように。

一つ目が、「ユダヤにいる不信仰な人々から救い出され」ることです。パウロは常に、ユダヤ人の不信者から危害を受けそうになり、逃げていました。そしてエルサレムに行く時には、死ぬことさえ覚悟していました。けれども、彼らから救い出されるようにと祈っています。パウロは、アジアであった苦しみについて、死から救い出されたことについてこう話しています。「2コリント 1:8-10 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついこのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」

次に、「エルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように」ということです。この実が、実としてユダヤ人の兄弟たちに受け入れられるようにということです。持っても、その意味する所を知らなければ意味が無くなってしまいます。このことによって、交わりの恵みにあずかれるようにという祈りです。

最後に、「神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることができますように。」ということです。醸金による奉仕が受け入れられたのであれば、神の御心によって喜びを持つことが出来るでしょう。そして、その喜びを持って行って、ローマにいる信者たちと、憩いの時を持つことが出来るようにと書いています。ローマにいる人々は既に信者である場合が多いですから、パウロは励ましを与えると同時に、彼らの中にいて休みを得ることが出来ると思います。キリスト者たちと共にいることは、霊的にリフレッシュされます。

こうして福音宣教の計画と祈りを見ていきました。そこにある優先順位を知れたのではないかと思います。自分が召されたことを第一優先としていくという姿が見られたでしょう。そして、一致、それは意見の一致ではなく、愛による奉仕、目に見える醸金という形での奉仕によって成り立つことが分かりました。そして多くの祈りを必要としています。